

## あとがき Postscript

宮坂 瑠子

MIYASAKA, Yuko

総合人間学会では、このたび学会誌『総合人間学 第7号』の発行にあたり、はじめて電子ジャーナルの形態を採用した。デジタルメディア時代を迎えて、学会誌、学術誌の電子化は世界的な流れとなりつつあり、研究のグローバル化も急速に進んでいる。

電子ジャーナルは、頁数や紙の質など、紙媒体の書籍のもつさまざまな制約から自由であり、紙媒体の書籍ほどパッケージとしての個性を主張せずに、コンテンツの柔軟な構成を可能とする。当学会が学会誌の電子ジャーナル化に踏み切ったのは、主としてこのような特性に着目してのことであるが、今後さらに、本学会誌がインターネットを通して国内外の研究者との広範な学術交流や議論のたたき台となることを望んでいる。

本学会誌『総合人間学 第7号』は、第一部と第二部で構成されている。以下にそれぞれの内容を概観してみる。

第一部は、2012年5月に開催した総合人間学会第7回大会のテーマ「3.11と総合人間学—人間（ヒト）・未来への選択」に基づき、大会シンポジスト、コメンテーターほか、上記のテーマに関するさまざまな論者の主張、思いを集めたもので構成されている。この第一部については会員、非会員を問わずご高覧いただくことを願って、『3.11を総合人間学から考える』と題して、学文社から書籍としても出版した。

総合人間学会は2006年5月に発足して以来、人間社会、地球未来に関わる諸問題を会員間で共有し、「人間はどこからきてどこへ行くのか」「人間とは何か」を問い続けてきた。さまざまな学問分野の専門家や人間の織りなす諸問題に関心をもつ方々で構成された当学会では、それぞれの専門知、経験知を活かして喫緊の諸問題を考察してきた。未曾有の災害「3.11」はまさに当学会のめざす多角的、総合的なアプローチを必要不可欠とする問題であり、第7回大会でもそれを取り上げた次第である。

第一部のⅠ～Ⅲでは、「3.11」とその後に関する大会時のシンポジスト、コメンテーターほか、さまざまな論者の主張、思いを集めたもので、拠って立つ学問分野は、社会学、霊長類学、哲学、環境思想、文芸学、教育学、臨床心理学、ドイツの日本学等々、本学会の特性を反映して実に多様である。その共通の論点は、「3.11」という大災害をどうとらえ、露呈したさまざまな深刻な問題をどのような観点からどのように解決すべきか、ということにある。Ⅱのなかには、被災地の人々の悲しみ、怒り、呻きを感じ取り、その心と向き合い、思いを共有し合うことを願ってその切実な現実を描き出したエッセイ、論文がある。そこで語られているのは、再び原発を推進しようとする動きに抗うことなく座視するに忍びない、被災者たちのあまりにも厳しい現実である。

Ⅱの一部、Ⅲの論文で指摘されているように、今

まさに文明全体の大転換期とすべき時代であるといえるが、「3.11」は図らずもそれを裏づけるものとなった。3.11を経験した今こそ、地球、生態系、人間をまもるために、エネルギー・ライフスタイル・産業構造等々、生活の根幹から見直すべきときであり、その方向性が問われている。その再構築の視点と方法の考察は本学会においても重要な課題となっている。

IVに関して——当学会は、発足以来、初代会長（現名誉会長）小林直樹氏による問題提起を契機として、「総合人間学」のパラダイムを追究してきた。今回は現会長小原秀雄氏の「自己家畜化論」を理論的枠組みに据えて総合人間学の課題を考察したものと、小林氏の二冊の新刊書を通してその課題と方法を論じたものとの二編を掲載した。総合人間学会は、地球、生態系にとって持続可能な環境を構築し、人間のありようを深く考察するための理論的基盤となるような、総合人間学の課題と方法の追究を今後も続けていく所存である。

なお、本学会第7回大会でシンポジストを務められた佐藤節子氏は昨年逝去された。ここに謹んで哀悼の意を表するとともに、これまでの学会に対する多大なる貢献に感謝申し上げたい。（佐藤氏の論文は当学会誌第1巻、及び『総合人間学の試み』（「シリーズ総合人間学」第1巻、学文社）に掲載されている。）

第二部は会員の方からの投稿論文・エッセイ・報告を中心に構成されている。さらにこの第7号から新たなコーナーとして、「論壇エッセイ」のジャンルを設けた。このジャンルは、論文とエッセイの中間的形態に位置づけられるもので、この提案者であ

る本学会副会長、尾関周二氏は、このコーナーの、「総合人間学の課題や論点を自由に提起して論じるフォーラム的ジャンル」としての活用に期待を寄せている。

今回は新規に入会された二氏の論考を掲載した。いずれもきわめて読み応えのあるもので、「論壇エッセイ」の名にふさわしい、大いに啓発される重厚な内容となっている。

また、もう一つの新しい企画として、会員の新刊書紹介コーナーを設けた。これも電子ジャーナルの特性ゆえに実現したことである。

一般会員からの投稿による論文・エッセイ・報告は、本学会の厳正なる査読を通過したものである。査読の結果、掲載に至った論文3篇、エッセイ、報告各一篇ずつの五編は、それぞれの専門分野や関心から人間学的現象に向き合い、独自の視点から分析や理論の構築を試みている。当学会は、その性格上、多様な関心、多様な専門分野の方で構成されており、それぞれの関心、専門を越えて異なる分野の視座、知見を学ぶことのできる場でもある。会員の方々が、論壇エッセイはもとより、論文・エッセイ・報告、あるいはまた会員の著作を通して、互いに刺激し合い、活発に学び合うことができれば幸いである。

なお、書き手のニーズに配慮したコンテンツの調整が可能である電子ジャーナルの利点を活かし、次号より、学会誌に投稿される論文・エッセイ・報告それぞれの枚数上限を引き上げることになった（詳細は投稿規程等を参照されたい）。これは、会員の方から、十分に主張を展開するにはもう少し枚数が欲しいとの声があったための措置である。これを機にできるだけ多くの会員の方に、本学会誌を自身の研究成果発表の場として位置づけ、積極的に投稿し

ていただくことを願っている。また、若手研究者を対象として優れた投稿論文に対する「若手研究者奨励賞」を新設したので、該当する会員の方は奮って応募していただきたい。

最後に、本学会誌のはじめての電子ジャーナル化、およびその編集は、ひとえに当学会編集幹事、吉田健彦氏のご尽力によって実現したものであることをご報告し、同氏に心より感謝の意を表したい。

宮坂 琇子

(東海大学名誉教授・本学会編集委員会委員長  
／教育心理学)